〈翻刻〉

【解題】ブッセ「古代哲学史」講義（二）*
——清沢満之ブッセ講義自筆ノートの翻刻・翻訳

西　尾　浩　二

解題

ここに翻刻し翻訳するのは、清沢満之（1863-1903）が残した東京大学在学中の未公開自筆ノートの一部で、ドイツ人哲学者ルートヴィヒ・ブッセ（Ludwig Busse 1862-1907）による「古代哲学史」講義の筆記録である[1]。その前半部分（ソクラテス以前のイオニア哲学からプラトンの生涯と学説まで）は、すでに本研究紀要の前号で分割して公表されている[2]。今回公表するのは、残りの後半部分（アリストテレスの生涯と学説から新プラトン主義まで）である。以下では、翻刻・翻訳の元となった資料と関連人物（清沢満之、高嶺三吉、ブッセ）について、前号に掲載の解題と重なるところも多いが、簡単に解説する。

清沢満之は 1883 年（明治 16 年）9 月に東京大学文学部哲学科に入学し、1887 年（明治 20 年）7 月に帝国大学文科大学哲学科を卒業するが、その間に作成されたと見られる自筆の受講ノートや自習ノートが「西方寺所蔵清沢満之史料」——西方寺（愛知県碧南市）に残されていた自筆原稿・ノート類が大谷

＊編集委員会注　翻刻と翻訳の全文は大谷大学学術情報リポジトリ（https://otani.repo.nii.ac.jp/）に掲載。

1　解題にあたり以下を参照した。西尾浩二「明治前期の東京大学外国人哲学教師の資料調査——日本における西洋哲学の初期受容に関する調査・分析のために——」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第 29 号、2012 年、59-120 頁）、『フェノロサ「哲学史」講義』（監修・解題　池上哲司、2013 年）、『フェノロサ「哲学史」講義（続）』（監修・解題　村山保史、2016 年）。本研究にあたり「西方寺所蔵清沢満之史料」の調査・利用をご許可頂いた西方寺、『高嶺遺稿』の写真化と利用をご許可頂いた金沢大学附属図書館に改めて謝意を表したい。

2　西尾浩二「ブッセ「古代哲学史」講義（一）——清沢満之ブッセ講義自筆ノートの翻刻・翻訳」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第 37 号、2020 年、1-45 頁。

大学真宗総合研究所により整理されたもの――のなかに現存する。「清沢満之ブッセ講義自筆ノート」もそこに含まれている。翻刻作業はすでに真宗総合研究所でなされていたので、その翻刻を清沢原本の複写写真や後述する高嶺ノートと照合しながら校閲し、新たに翻訳した。翻刻･翻訳の原本は1冊の自筆ノート（縦20.3㎝×横16.7㎝のマーブル紙表紙の西洋ノート）であり、「西方寺所蔵清沢満之史料」複写写真:「自筆講義ノートB-4-1、フィルム番号025」と「自筆講義ノートB-4-2、フィルム番号026」に対応する部分を翻刻・翻訳した。

翻刻校閲と翻訳にあたっては、高嶺三吉の残した受講ノートとの比較照合を行なった。高嶺三吉は清沢満之の同期生で1887年（明治20年）7月6日に卒業を目前に病没したが､東大時代の彼の受講ノートが『高嶺遺稿』全7冊（二千数百頁）として金沢大学附属図書館に所蔵されている。今回照合に用いたのはそのうちの第4冊（縦22㎝×横17.2㎝のマーブル紙表紙の西洋ノート）で、表紙にはPhilosophy (By Nox). / History of Ancient Philosophy (By Dr.Busse)と書かれた紙が貼られている。第4冊の内容は以下の通りである。

Philosophy lectured by Nox, vol. Ⅰ 28. Sep. 86.
Philosophy by Pro. Nox, vol. Ⅱ 8./ Oct. 86.
Philosophy Ⅴ vol.
Philosophy. Ⅵ.
Philosophy. Ⅶ 5. December
History of Ancient Philosophy.
History of Philosophy. vol. Ⅰ. by. Busse. 2. Feb.
History of Philosophy vol. Ⅱ 20. March / 86
History of Philosophy vol. Ⅲ 20. April. / 86.

このうちのHistory of Ancient Philosophyの全部を清沢ノートと比較照合し、記述の異なる箇所では適宜、高嶺ノートの記述を校訂註として注記した。全体的に見れば清沢ノートの方が高嶺ノートよりも正確で優れているが、両ノートの比較照合によって初めて判明したことも少なくない。まず、清沢ノートには不明箇所や欠落箇所があり、そのいくつかを高嶺ノートからの推定によって埋めることができた。とくに今回新たに公表される部分について言えば、アリス

トテレスに関する記述の最後の数行は、清沢ノートになかったものであり、かなり大きな欠落の補充となっている。また、清沢が綴りを略記した箇所や筆致の乱れた箇所では、比較照合作業を通して初めて正しい語句が確定された場合も多々あった。さらにまた、清沢ノートには日付がないが高嶺ノートには不完全ながらいくつか日付が記されているので、明治19年度のブッセ講義と同定できたことに加え、講義各部のおおよその時期をも推定できた。

明治期の東京大学には、西洋の知識や技術を摂取し日本を近代化する目的で雇われた外国人教師が多数いた。ブッセもその一人である。ブッセはベルリン大学で博士号を取得して間もない1887年（明治20年）1月に来日し、1892年（明治25年）12月まで約6年間、東京大学に在職して哲学や審美学等を教えた。「傭外国人教師・講師履歴書」（東京大学庶務部人事課作製）には次のように記されている。

獨逸国人
ルドウヰヒ、ブッセ
Ludwig　　Busse
明治二十年一月十日ヨリ同二十三年一月九日迄三ヶ年間ノ期限ヲ以テ招傭
帝国大学文科大学哲学教師　授業時数一日四時間内
月俸日本一円銀貨三百七十円
旅費来帰航共各銀貨六百五十円
宿料一ヶ月日本紙幣金四十円
明治二十三年一月十日ヨリ同二十六年一月九日迄三ヶ年間傭継続
同二十五年十二月二日依願満期前解約帰国
備考
国籍　獨逸国
生年月日　千八百六十二年九月二十七日
学位　ドクトル、フィロソフィー

着任時ブッセは24歳の青年であった。当時は三学期制（9-12月、1-3月、4-7月）であったから、1月着任のブッセの講義は学年途中の第二学期から始まる。その一つがこの「古代哲学史」である。ブッセ自身はその内容を申報（実施した

授業内容等を大学に報告する文書）でこう報告している（「文科大学年報　起明治二十年一月止明治二十年十二月」、下線は原文のまま）[3]。

> 余ハ第二学期ニ於テ（中略）第二年第三年両級ニハテールスヨリアリストートル迄ノ古代哲学ノ沿革ヲ講授セリ（中略）
> 第三学期ニ於テ（中略）第二年級ニハアリストートル以後ノ哲学エピキューロス　ストイック学派希臘懐疑学及新プラトー学派ヲ講明シ加フルニデカルトヨリショーペンハウエルニ至ル近世哲学ノ大要ヲ摘梗ス（第三年級モ亦此級ニ合併教授セリ）

清沢と高嶺のノートは実際にこの内容の講義がなされたことを実証している。ノートの内容を概観しておこう。哲学の課題と時代区分を導入的に説明した後、講義は大きく三部に分かれる。まず「Ⅰソクラテス以前の哲学」では、イオニアの哲学者たちを皮切りにピュタゴラス、エレア派、ヘラクレイトス、エンペドクレスと原子論者、ソフィストらの各思想を順に解説している。次に「Ⅱギリシア哲学の隆盛」では、ソクラテスの生涯と哲学から、小ソクラテス学派（メガラ派・キュニコス派・キュレネ派）、プラトンの生涯と学説（対話法、自然学、魂論、倫理学、政治学）、そして――ここからが今回新たに公表される範囲であるが――アリストテレスの生涯と学説（論理学、形而上学、自然学、魂論、倫理学、政治学）まで系統立てて論述している。ここまでがブッセ申報の第二学期の内容に相当する。最後に「Ⅲアリストテレス以後の哲学」では、エピクロス派（論理学、自然学、倫理学）、ストア派（論理学、自然学、倫理学）、ギリシア懐疑主義、新プラトン主義（ピロン、プロティノス）までを扱っている。これはブッセ申報の第三学期の内容に相当する。申報によれば、以上の古代哲学史に加えて、デカルトからショーペンハウエルまでの近世哲学の概要を講義したはずであるが、その筆記録は清沢ノートでは確認できていない。高嶺ノートの古代哲学史の末尾にわずかに残るデカルトに関する簡単な解説が、それの

3　西尾浩二（2012）前掲論文を参照。ブッセの申報全文は 94-102 頁、ブッセの他の講義については 80-84 頁を参照（なお 80 頁の記述に誤りがある。2 点訂正したい。誤:「来日したとき、ブッセは 25 歳」→正：「来日したとき、ブッセは 24 歳」。誤：「約 5 年間の在職期間」→正：「約 6 年間の在職期間」）。

一部かもしれない。そこで、古代哲学史を超える内容だが、参考までにそれも今回の翻刻・翻訳に含めることとした。

本翻刻・翻訳の意義として、少なくとも三つの点を挙げることができる[4]。第一に、西洋古代哲学史の全体を扱った講義としては日本の大学でおそらく最初期のものに属するという点である。ブッセ以前に東京大学で哲学を講じたサイル（1817-1890）、フェノロサ（1853-1908）、クーパー（生没年不詳）、ノックス（1853-1912）のうちで、古代哲学に関する内容を授業で扱ったのはクーパーとノックスである。だがクーパーが扱ったのはアリストテレス『ニコマコス倫理学』、ノックスが扱ったのはプラトンのイデア論や国家論を含む倫理学というように、いずれも限定的な内容で総合的な古代哲学史ではなかった。第二に、清沢が東大時代に教師から受けた影響を分析し実証する際の根拠資料の一つに数えられるという点である。清沢は後年みずから哲学を講義しており、それには古代哲学史も含まれているからである。そして第三に、当時の高等教育の実態（内容、方法、水準等）を知るための一次資料となる点である。

なお今回参照できなかったが、ブッセの講義のうちで論理学、倫理学、美学、哲学史、哲学入門の少なくとも五種類が私家版（活版印刷）の形で発行され、「哲学史」と「哲学入門」は早稲田大学図書館に所蔵されているとのことである[5]。「哲学史」の本文は380頁で表紙に1891-1892年と印刷されているという[6]。1892年はブッセが東京大学を去る年である。古代哲学史もそこに含まれているとすれば、本翻刻・翻訳と突き合わせることによって内容や水準等の変遷をも知ることができるであろう。今後の課題としたい。

付記：本研究はJSPS科研費JP18K00024の助成を受けたものである。
なお、資料については、筆者に直接ご照会ください。

4　次の論文で若干の分析と考察を加えた。西尾浩二「清沢満之と古代哲学――明治前期における西洋哲学の初期受容の一側面――」『哲學論集』第66号、大谷大学哲学会、2020年、17-29頁。

5　赤木昭夫『漱石のこころ――その哲学と文学』、岩波新書、2016年、49頁。

6　赤木昭夫「謎のブッセ博士講義録――漱石の哲学遍歴　その二」『図書』第778号、岩波書店、2013年、30-34頁。